

もう一つの戦争

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

前回は、「カミカゼという不潔な言葉」という題でブログを書いた。あの9.11事件以来、フランスを始めとする諸外国のメディアが、「自爆テロ」の意味で盛んに「カミカゼ」という言葉を使っているが、その使い方を評して「不潔」と呼んだのである。

私は、事件の直後、「もう一つの戦争」という題で、日本の主要な新聞社や雑誌社にメールを送ったり、大使館に電話を入れたりして、フランス・メディアが行っている日本語「神風」の誤用に抗議するように訴えたのだが、結局この件は放置されてしまった。

今では、「カミカゼ」が「自爆テロ」の代名詞のようになってしまい、イラクなどで自爆事件の起こるたびに、この言葉が氾濫している。

私が日本のメディアに送った手紙を公表してほしいという希望があったので、2001年10月14日に書き、朝日新聞社と文藝春秋社に送ったものを、今回のブログにそのまま載せることにした。以下は、その内容である。

《9月11日、フランス時間の午後3時すぎ、テレビのスイッチを入れると、ニューヨークの世界貿易センターに対するテロ攻撃を伝えるニュースが目に飛び込んできた。予定していた外出をやめ、それから二日間にわたって、テレビの前に釘付けになった。

夜になり、インターネットでルモンド紙の記事を読もうとして唾然とさせられた。最初に目に入った見出しが「最悪のパールハーバー」となっていたからである。世界各国の反応を集めた記事なのだが、フランス民主主義連合(UDF)党首で、次期大統領選に出馬するとされているバイルーの「これは最悪のパールハーバーだ」という言葉を、ルモンド紙がシラク大統領やジョスパン首相の声明をさしおいて、わざわざ見出しに選んでいるのである。

「やっぱり」という思いが強かった。というのも、昼のテレビ放送で、パールハーバーという言葉が使われているのをいちど耳にしたからである。「カミカゼ」という言葉もなんか使われていたが、これは今では普通名詞のようにになっている言葉なので、あまり気にする必要はないだろうと思っていた。しかし、パールハーバーをテロ行為と一緒にされるのはかなわないと思った。

この記事には、世界各国の反応が、フランス・国連・ヨーロッパ・南米・近東・アフガニスタン・アジアの順で詳しく述べられており、最後は中国のテロ断罪声明で締めくくられているのだが、すでに発表されているはずの日本の首相の声明については一言も触れていない。その代わり、日本赤軍派から届いたという「これは広島と長崎の死者に対する報復だ」という声明について事細かに述べられている。これらの扱いには、何か悪意があるのではないかと感じさせられるほどだった。

さて、翌日の朝日新聞衛星版を見て、今度は日本の評論家の言葉に唾然とさせられることになった。四人のうち二人が、「旧日本軍の特攻を思わせる」ということを書いているのである。特攻は、

軍事施設を目標とするれっきとした戦闘行為であり、祖国のための殉死である。旅客機をハイジャックし、多くの乗客を巻き添えにした、無差別なテロ行為としての自爆とは明らかに異なっている。

こんなことを言われるのを聞いたら、特攻隊員はさぞかし無念に思うだろうと考えながら、同じ新聞の広告欄に目をやると、日本の首相が顔写真入りで、これまた「特攻」について書かれた本に対する推薦文を書いているのを見て、これにも驚かされた。一国の宰相が新聞の広告欄で特定の本に対する宣伝を行う。こんなことがかつてあったのだろうか。文中に「特攻隊員の無念の叫びを聞く思いた」という言葉があるのも、なんとも皮肉な感じだった。

国家のための殉死というならば、世界貿易センターの瓦礫の中に埋もれた企業戦士たちの無念の叫びも同じであろう。日本もテロ行為の被害国であり、当事者であることをアピールする首相の肉声を、世界に先がけて聞かせてほしかった。「パールハーバー」とか「カミカゼ」などと言わせておかないで、日本の論理と立場を明確にし、今回のテロリズムの意味をはっきり示しておく必要があったのではないだろうか。

こちらでは、シラク大統領の迅速な行動が大々的に報道されたので、いっそうその思いが強かった。大統領は、レンヌ市での演説を中断し、米国を襲った「悪魔的な攻撃」に対する非難声明に切りかえたあと、急遽パリに戻り、エリゼ宮からのテレビ放映で、テロリズムに対する米国との連帯（ソリダリテ）を国民に訴えかけたのである。それ以後、ジョスパン首相とともに、パリのアメリカ教会で行われた犠牲者追悼式に詣でたり、ホワイトハウスに駆けつけ、ブッシュ大統領やブレア首相とともに米英仏の連帯を誓い合ったりしたことが連日詳細に報道された。

これに対して、日本政府の対応や行動に関するまとまった報道は皆無であった。英国首相の言動も逐一報道されるし、ヨーロッパ諸国の反応や首脳の言動、近東やアジアの情勢、ロシアや中国の様子などさかんに報道されるのに、日本のこととなると、たまに「ジャポン」という言葉が挿入されることはあっても、まったくと言ってよいほど問題にされていない。国際政治における日本の比重はこんなものなのかと思っていると、テレビ報道で、「おや」と思われるようなことに遭遇したのである。

小泉首相がホワイトハウスを訪れ、ブッシュ大統領とともに記者会見を行った日の翌朝である。フランス3のユーロニュースにその様子が映し出されたが、それはあつという間の放映で、解説もほとんど聞き取れないようなごく短いものだった。そこで、フランス2の朝のニュースでもう一度見ることにした。

フランス2のニュース番組は、フランスでも最大の視聴者を擁しており、それなりの公正さと権威を持つものと思われている。ところが、驚いたことに、映ったのはブッシュ大統領だけである。横に立っているはずの小泉首相の姿はカットされ、日の丸を背景に演説するブッシュ大統領の姿だけがクローズアップされ、大統領がタリバンに対する決意を新たに表明したという説明があっただけで、日本の首相の訪問については何も触れられなかった。

二度目のニュース時間を待ったが、同じだった。今度は、小泉首相が一人で立っている姿と報道陣がちらりと映っただけで、あとは一回目の放映とまったく同じである。あいかわらず日本のことについては一言もない。私はその日、あちこちチャンネルを回してみたが、そのかぎりでは、小泉首相の姿をたとえ一瞬にせよ目にすることができたのは、そのときが最後だった。

これを日本バッシングと呼んでよいのかどうか私にはわからないが、テレビ報道に何か干渉の手が加わっているのではないかと思われたのである。テレビ報道への干渉ということでは、テロ事件の直後に放映されたジョスパン首相の談話が、途中から画像の乱れとともに聞こえなくなってしまったのだが、アルテ（テレビ局）の座談会では、これを干渉ではないかと疑う声があがっていた。ジョスパンはシラクに先んじて「連帯」という言葉を口にしていたのである。

フランスのマスコミに、このような干渉、ある種の日本バッシングが感じられたのはこれが初めてではない。実は、9月11日に起こったニューヨークのテロ事件以来、それはかなり露骨な形で続けられてきたのである。日本の国家としての存在が無視され黙殺される一方で、ニュース解説者や記者の口からは「パールハーバー」という言葉がさかんに飛び出してくるし、自爆テロを行った飛行機を最初は「自殺飛行機」「自爆機」と言っていたのが、いつのまにか「カミカゼ」という日本語を用いるのが普通になってしまった。

先ほども言ったように、フランスのマスコミのこうした扱いを見ると、そこには何か悪意があるのではないかと感じさせられるほどなのだが、それがあながち杞憂でもないと思われたのは、事件の翌日、フランス2が行ったテロ特集番組においてであった。番組の締めくくりとして、なんと日本軍の真珠湾攻撃の古いフィルムが長々と映し出されたのである。

それだけにはとどまらなかった。このテレビ局が行った二回目のテロ特集番組に先だって、なぜか「東京の20年」という渋谷界隈の若者たちを追ったドキュメントが再放送された。なぜよりによってこんな時に、と思っていたのだが、その謎が解けたのは、最後の場面を見終わったときである。

渋谷のナイトクラブで、沖縄を舞台にした創作舞踊が演じられていた。虫取りに出かけた少女が三人の進駐軍兵士に乱暴される。そのあと、時代をさかのぼって、姫ゆり部隊の娘たちが自刃する場面となり、最後に神風特攻隊の三人の兵士が舞台に踊り出る。日の丸をつけた大きな戦闘機の模型が現れ、ケーブルに吊られて舞台から天井へと飛び上がっていく。

そして、この舞台の印象と哀調を帯びた歌の余韻がまだ冷めやらぬうちに、テレビの画面は、世界貿易センターに突入する自爆機の映像に変わっていたのである。

あの事件から一ヶ月たった10月10日の深夜、アメリカ・オーストラリア合作の *Paradise Road* (1997年 Bruce Beresford 監督) という映画がフランス2で放映された。これは日本に対する偏見に満ちた、反日感情を煽り立てる映画としか思えないのであるが、テレビ局の宣伝によると、「第二次世界戦争の最も痛ましく最も知られていないエピソードの一つを公正に描き出したもの」であり、未公開のフィルムだという。「戦争中、多数のヨーロッパ人を捕虜にした日本人」の野蛮さが描かれており、その無知蒙昧さの描写には驚かされる。私自身は、この映画の制作や公開の経緯を知らないし、歴史的事実にも詳しくはないので何とも言えないのであるが、捕虜のほとんどが女性ということにも、にわかには信じがたいものを感じるのである。

しかし、何よりも気になるのは、この映画について「ヌーベル・オブセルバテール」誌の批評欄に載った一文である。「いま人々は四十年昔に戻ったような気がするだろう」と意味深長な言葉が記されているのだが、これでいったい何を言いたいのであろう。「日本人とヨーロッパ人」というくり方にも疑念が残るのである。

フランスのマスコミに見られるこうした異常な「日本バッシング」や、米国との「連帯」という

言葉を執拗に繰り返す政府首脳の状態に、ユーロ統合を前にしたヨーロッパの世界戦略が見え隠れするように思える。

今年の春ごろから、「日本の没落」や「日本の崩壊」をテーマにした記事がフランスの新聞や雑誌に目立つようになった。それと同時に、市場としての中国への期待が急速に高まりつつあるのを見ると、今回のテロ事件を契機に日本を孤立化させようとする動きがしたいにはっきりした形を取り始めたのではないかと危惧させられる。

今回、戦争の危機が叫ばれているなかで、もう一つの陰險な戦争がすでに始まっているように思えてならないのである。》

[2007/11/14 magmag]